

うめ がしら かま あと  
梅 頭 窯 跡

大野城市教育委員会



鉄刃などの出土状況



窯跡全景

梅頭窯跡は上大利にあり、三兼池の南側に位置します。左の写真のように、窯跡の全長は約11.5mほど大きなもので、山の斜面をトンネル状に掘りぬいて造られることから、構造的には「地下式窖窯」と呼ばれています。時期は6世紀末から7世紀頃と考えられます。

この窯跡で最も注目されるのは、窯内から大きな石が見つかり、石の周囲から鉄刀・鉄鏃・須恵器などが出土したことです。上の写真からは、石の上に細長い鉄刀があり、石の周囲には須恵器がたくさん置かれているのが分かります。須恵器の中には、ベンガラという赤い色の顔料を入れたものもありました。こうした遺物の組み合わせから、梅頭窯跡は窯の操業終了後に石を持ち込み、墓に転用されたと考えられます。こうした事例が発見されたのは全国で初めてです。



鍔部分の拡大(処理後)



鉄刀の全景(処理前)



窯跡の覆屋

一番上の写真は、窯内から出土した鉄刀に施されていた象嵌です。象嵌とは、タガネで模様を線彫りし、そこに金・銀などをはめ込む技法です。鉄刀が出土した時は中段の写真のように錆で覆われていて分かりませんでした。X線撮影により象嵌があることが分かり、保存処理によって表出することができました。鍔の部分にはハート形の模様が連続して施されており、鍔の縁にも波形の模様があります。分析の結果、銀を用いていることが分かりました。

このように、梅頭窯跡は全国的に見ても非常に珍しい遺跡であることが分かりました。このため、地権者や工事関係者・地元の方々の協力のもと、平成16年3月に保存のための覆屋を建設しました。今後、状態を見守りながら、貴重な遺跡を保存していくとともに、広く公開していきます。

(2005.8)